参考：参加者の声
平成 23 年度アンケートより抜粋

今回は「考える」研修でした。これまでいかに「考える」ということに怠けていたか痛感し、このままだと、学生に考えろということができない。今後、学生と共に課題を見つけて考え解決することで、問題が大学にあれば、それを学生の人間形成につなげ活かしたいと思う。（20 代 D 班）

情報技術の活用において、導入やテクニックが必要ではなく、プロセスが大切であることがわかった。物事の本質を見抜こうとする意識、建学の理念や教育目標との関連付けが必要であることがわかり、常に意識して仕事を行っていきたい。（30 代 E 班）

教職協働は大学をつくりあげていく上で、とても大きなことであると感じている。教員から職員への協力を待つのではなく、自ら教員とコミュニケーションを取るように努力しなければならいないと改めて思った。学生の不安・不満・要望を教員と一つでも多く解決していければと考えた。（20 代 C 班）

情報を処理する能力だけでなく情報を活用する能力が必要とされている。情報を活用するためには、まずどのような方法で情報を共有されているのかを知り、学ぶ必要が大切で今後もいろいろな物を知り、活用できる能力を持てるようにしたい。（20 台 B 班）

様々な意見が出ることで多面的にかんがえることができ、視野を広げることが出来た。業務でも可能性を広げて考えてみること、意見を出し合い計画を練り上げる過程を取り入れたい、そのため、職場で定期的にディスカッションする場を設けたい。（20 代 B 班）

今後の大学の在り方の根幹を改めて考えさせられた。今の大学は大変大きな役割を課せられて、他人任せではなく主体的に教職員の壁を取り払って全力をあげねばならないと思った。（40 代 F 班）

情報とは業務の処理能力を上げるツールとしか目が行っていなかった、情報をどのように収集・分析・共有・選択・表現するなどのあらゆる能力が備わっていないといけないことに気付いた。（20 代 E 班）

他者の意見を否定せず、それを自分の意見に結びつける関係性を持たせてシナジー効果を得ることが体感できた。また、今回のように目的やテーマを設定し、ブレそうになったらしっかりと立ちかえることで、論理の通った企画やそれに向けた行動ができるのではないかと強く感じた、問題発見から課題解決、そしてその過程でのコミュニケーションなど普段の職場で求められる能力が向上したと思う。（20 代 A 班）

通常の研修では参加型ではなく「受け身」のスタイルが一般的だが、参加しなければ取り残されてしまう危機感があって良かった。日常の業務では客観的に大学の状況を見まわしたり、問題点を改善するよう立案することは少ないので良い気づきの時間だった。（30 代 C 班）

全国の大学から多種多様な業務・キャリアを持つ方々が集い、大学の現状について深く掘り下げ熱く語る、そうした機会は今後のキャリア形成の上でも非常に有意義だった。頭から何度か煙があがりましたが、チーム全員で作り上げたパワーポイントを見たとき、ここに来て良かったと心から思えた。（20 代 A 班）

業務内容だけでなく、職員の意識改革が重要だと感じた。少子化が進んでいく中で、まだ私立大学での対策が本学では不十分である。情報を活用して戦略的なアプローチへとつなげなければ生き残っていくのは困難であり、若い世代の私たちが、何でも進んでやっていきたいという意欲向上につながった。（20 代 F 班）